C—13　遊具の新奇性と幼児の遊びに関する実験的研究

広島大教育　伊藤冨美　○佐藤　園

目的　適度な新奇性は望ましい遊具条件とされ，従来この仮説は，新奇・複雑刺激を用いた実験事態で，Fuller, C., Rabinowitz, F.M. らにより検証されてきた。しかし，新奇対象に対する探索活動の誘発が，接近—回避の均衡関係の上に成り立つことを考えると，遊具対幼児間の相互作用のシステムは，遊具，幼児，事態の特性により異なった様相を示すことが予想される。本研究では，以上の特性として，新奇性，不安傾向，同輩児の存在を取り上げ，個々の特性が遊具の適性新奇性水準（ANL）に及ぼす影響と両者の相互作用を以下の作業仮説に基づき検討することを目的とした。(1) 高不安群(HG)は低不安群(LG)よりANLが低い。(2) 同輩児が存在した場合（Peer Con.）は存在しない場合（Alone Con.）よりもANLは高い。(3) Alone Con. でLGとHGのANLの差は大きいが，Peer Con. でその差は減少する。

方法　1. 遊具の新奇性レベル(NL)を測定し，高いもの(H)，中位のもの(M)，低いものの(L)を選定　2. 被験児の不安傾向・被験児間の親密度を測定し，Peer Con. で条件間に差がないように実験群を設定　3. 被験児　幼稚園（下市内）4～5歳児40名とPeer 20名　4. 実験手続　予備実験に基づき，Alone, Peer Con. とも遊具で10分間遊ばせ，観察者による行動のチェックリストにより記録する。

実験デザイン　遊具の新奇性(3) × 不安傾向(2) × Social Con.(2)（Alone, Peer）

結果　仮説(1)(2)については，統計的に有意差はなかったが，仮説を支持する傾向が認められた。仮説(3)については，NLMの遊具において，不安傾向とSocial Con.の間の相互作用に有意差が認められた。（$F = 5.82$　$df = 1/36$　$P < .01$）